

抄 録

〔 第52回鹿児島県公衆衛生学会 〕
平成22年 5月21日

第52回鹿児島県公衆衛生学会口頭発表

鹿児島県における新型インフルエンザ検査の解析

上村 晃秀 上野 伸広¹ 濱田まどか
湯田 充典 吉國謙一郎 藤崎 隆司
三谷 惟章

〔 第52回鹿児島県公衆衛生学会 〕
平成22年 5月21日

平成21年度、世界中で新型インフルエンザA/H1N1pdm (以下、「AH1pdm」という。)が大流行(パンデミック)した。

当センターで平成21年5月以降、インフルエンザ様疾患患者検体の検査を行い、リアルタイムRT-PCR(以下、「rRT-PCR」という。)を基準にした簡易迅速検査キットの性能やインフルエンザA型の動向等について解析し、次のことを報告した。

医療機関及び当センターで実施した簡易キット結果と、rRT-PCRの結果を比較したところ、AH1pdmについて、治療方針の決定に有効であることが認められた。

また、医療機関で行った簡易キット陰性者のうち31.4%がrRT-PCRで陽性となり、簡易キット結果が陰性であってもAH1pdmの感染を否定できないことが確認された。

医療機関において簡易キット結果が陰性であっても、受診した患者・家族に対して、インフルエンザについての予防対策(咳エチケットやマスクの着用の周知)や、体に異変を感じた場合の早期受診について指導しておくことが重要であると報告した。

¹ 県立薩南病院

鹿児島県におけるつつが虫病の発生状況及び臨床症状の解析

濱田まどか 吉國謙一郎 上村 晃秀
湯田 充典 上野 伸広¹ 藤崎 隆司
三谷 惟章

つつが虫病は、つつが虫病リケッチアを保有するツツガムシに刺されることによって発症する熱性発疹性疾患で、四類感染症に分類されている。

鹿児島県におけるつつが虫病の報告数は、毎年国内の報告数の10～20%を占めている。

今回、2000年度から2009年度までの10年間に、当センターで検査を行った検体について、発生状況及び臨床症状について解析したので報告した。

10年間の発生状況より、男性は山地での森林作業時に多く感染し、女性は畑での農作業時に多く感染していることが確認できた。また、大隅半島の患者数が他の地域に比べて非常に多いことが確認できた。

臨床症状については、発熱・発疹・刺し口の三徴候を80%以上の患者が呈していることが確認できた。

¹ 県立薩南病院

県内流通食品の残留農薬等の検査について～ポジティブリスト制度で示された検査法の適合性調査～

岩屋あまね 下堂菌栄子 福司山郁恵
大小田修司¹ 小原 健二² 西村 修一³
佐久間弘匡

〔 第52回鹿児島県公衆衛生学会 〕
平成22年 5月21日

2006年5月29日よりポジティブリスト制度が施行されたことにより、規制対象の農薬等が大幅に増加し、厚生労働省から新たに農薬等の多成分一斉試験法が通知された。しかし、同試験法は対象薬剤すべての同時分析を保証したものでなく、各検査機関で適用の可否を検証することが必要であったことから、2006～2008年度の3年間で同試験法の適合性について調査を実施した。

その結果、食品の種類により適合性のある薬剤は異なるが、農薬では最多で224種、動物用医薬品では最多で47種の薬剤について、適合性が確認された。また、同試験法を用いることで、分析項目数を大幅に増やすことができた。

試験法の適合性調査と併行し、県内流通食品について、農薬214検体、動物用医薬品342検体の検査を実施した。その結果、103検体から農薬が、9検体から動物用医薬品が検出されたが、いずれも基準値以下であった。

- 1 熊毛支庁屋久島事務所
- 2 大隅地域振興局保健福祉環境部志布志支所
- 3 生活衛生課

この精製工程を改良した法（以下、改良法という。）により夾雑物は十分に除去され、一斉法で発生していた数々の問題点は解消された。その結果、測定可能な項目数は一斉法では93項目だったが、改良法では137項目に増加した。しかし、改良法では、新たに追加したSIミニカラムに保持されたまま溶出・回収されない農薬があり、今後の検討課題となった。

第36回九州衛生環境技術協議会口頭発表

沖永良部島における新型インフルエンザ 集団発生について

上村 晃秀 御供田睦代 蓑田 祥子
濱田まどか 吉國謙一郎 藤崎 隆司
佐久間弘匡 三谷 惟章

〔第36回九州衛生環境技術協議会〕
平成22年10月14日 佐賀市

（内容は、病原微生物検出情報Vol. 31 No. 8(No. 366)と同じ）

茶の残留農薬一斉分析における精製法の 検討

岩屋あまね 下堂蘭栄子 榎元 清美
福司山郁恵 佐久間弘匡

〔第36回九州衛生環境技術協議会〕
平成22年10月14日 佐賀市

2005年に厚生労働省から通知された「GC/MSによる農薬等の一斉試験法（農産物）」（以下、一斉法という。）に従い、茶の残留農薬一斉分析を実施したところ、茶由来の夾雑成分の除去が不十分で、多数の問題が発生した。

茶由来の夾雑物の主成分はカフェインであることから、試料の前処理に、カフェイン除去に有効なSIミニカラム精製を追加した。また、色素除去効果の高いGCミニカラムを500mgから2gに増量し、脂肪酸除去効果の高いPSAミニカラムと連結して精製を行うこととした。

鹿児島県における海水温と水質の状況について

坂元 克行 尾辻 裕一 永井 里央
宮ノ原陽子 長井 一文

〔第36回九州衛生環境技術協議会〕
平成22年10月14日 佐賀市

本県沿岸の海水温と水質（COD）の変動状況について、1980年以降の公共用水域水質常時監視の結果をもとに報告した。

海水温、CODともに、時系列と季節変動（採水月）を加味したダミー変数を用いた回帰分析を行い、Web Decomp（統計数理研究所）を利用してトレンドを求めた。

結果、海水温、CODともに各調査地点で一様な変動状況とはなっていない。また、解析を行った期間を通して、海水温はほぼ一定の変化（上昇）を示した地点が多かったのに対し、CODは特定の期間に変化が大きい地点が多かった。

また、水深100m以深の解析結果からは、長期的変動傾向が把握しやすいと考えられた。

病原微生物検出情報誌上发表

第18回ダニと疾患のインターフェースに関するセミナー
SADIトキの里大会2010ポスター発表

沖永良部島の知名町における新型インフル
エンザA/H1N1pdm集団発生

鹿児島県のリケッチア症の現状と課題

上村 晃秀 御供田睦代 蓑田 祥子
濱田まどか 吉國謙一郎 藤崎 隆司
佐久間弘匡 三谷 惟章

御供田睦代 濱田まどか 吉國謙一郎
上村 晃秀 蓑田 祥子 藤崎 隆司
三谷 惟章

〔病原微生物検出情報Vol. 31 No. 6(No. 364)
平成22年6月 感染研感染症情報センター〕

〔第18回ダニと疾患のインターフェースに
関するセミナーSADIトキの里大会2010
平成22年6月11日～13日 佐渡市〕

全国でも新型インフルエンザA/H1N1pdmの集団発生
がなかった5月に、鹿児島県沖永良部島の知名町で、新
型インフルエンザA/H1N1pdmが原因とされる集団発生
を認めたのでその概要を報告した。

つつが虫病及び日本紅斑熱の患者報告数が、鹿児島県
は全国でも上位である。当センターでは、6株（Gilliam,
Karp, Kato, Kawasaki, Kuroki, YH）の抗原を用いて、
血清抗体検査を行っている。患者のペアの血清（急性期
及び回復期）を測定しても陰性となる検体があり、患者
から病原体を検出することやフィールド調査による野鼠
からの病原体検出が必要と考える。平成23年度から調査
研究として、これらを実施し、さらに、ツツガムシ及び
マダニによる感染リスクマップを作成する。

沖永良部島の知名町における新型インフル
エンザA/H1N1pdm集団発生〔最終報告〕

上村 晃秀 御供田睦代 蓑田 祥子
濱田まどか 吉國謙一郎 藤崎 隆司
佐久間弘匡 三谷 惟章

〔病原微生物検出情報Vol. 31 No. 8(No. 366)
平成22年8月 感染研感染症情報センター〕

病原微生物検出情報Vol. 31 No. 6(No. 364)で概要報告
した続報で、集団発生の新型インフルエンザA/H1N1pdm
の検体から分離したインフルエンザウイルス株につい
て、HA価及び遺伝子解析（国立感染症研究所で実施）
を行い、平成21年に流行したウイルス株と比較して、特
に抗原の変異は認められず、同じものと考えられたこと
を最終報告した。